

Title	vielleichtをめぐって
Sub Title	Einige Bemerkungen über vielleicht
Author	岩崎, 英二郎(Iwasaki, Eijiro)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2002
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.19 (2002. 3) ,p.1- 14
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別寄稿
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20020331-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20020331-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## vielleicht をめぐって

岩崎英二郎

vielleicht には、その文副詞(Satzadverb) ないし話法詞(Modalwort)としての役割のほかに、心態詞(Abtönungspartikel)としての用法もあることは、日本でドイツ語に携わっている人たちのあいだでは、まだまだ知られていないようである。これについてはあとで述べることにして、そのまえに、文副詞としての vielleicht が明治以来の独和辞典のなかでどのように記述されてきたかについて、まず触れておきたい。

もともと vielleicht の前身は中高ドイツ語の vil lichte であって、文字通りには sehr leicht (きわめて容易に) を意味し、Grimm 兄弟の Deutsches Wörterbuch によれば、元来は原義のとおり実現の可能性や期待度の高い場合(きわめて容易に起こり得る)にも用いらていたらしい。しかし結局は、あることが「起こり得る」「あり得る」(kann sein, mag sein)という単なる可能性を示すだけの言葉になったとのことである。つまり日本語で言えば、「たぶん…だろう」ではなく、「あるいは…かもしれない」を意味するわけである。いまでこそ vielleicht の訳語としては「もしかすると」や「ひょっとしたら」が定着しているが、私たちがドイツ語を習い始めたころの、つまりいまから60年以上もまえの独和辞典では、「たぶん」「おそらく」などの訳語が主流であって、「もしかすると」や「ひょっとしたら」などの訳語が全然見当たらない辞書すらあったものである。少数ではあるが心あるドイツ語教師たちのあいだで高く評価されていた佐藤通次氏の『独和言林』でさえ「多分、おそらく、あるいは、ひょっとすると、ひょっとして、もしや」を単に列挙するにとどまっていた。そうした状況は、いまから40年まえの1960年代ごろまで続いていたと見てよいであろう。たとえば

1958年に刊行された相良守峯編『大独和辞典』でも「多分、おそらく、ひょっとしたら、もしかしたら、あるいは、ひょっとして、もしや」など多数の訳語がなんの区別もなく並んでいるだけである。

ところで日本におけるドイツ学の始まりは、日本とプロイセンとのあいだに修好条約が結ばれた万延元年（1860年）というのが通説になっているが、それから約十年後の明治5年（1871年）になって、まだまだ素朴なものではあったが、わが国で初めての独和辞書が何種類か出版された。それらの辞書に見られる *vielleicht* の訳語が大いに参考になる。「オホカタ、タブン多分、オソラクハ恐、フト不図」（學半社『亭和袖珍字書』）、「恐クハ、多分」（『獨和字典』、通称『薩摩辞書』）、「恐ラクハ、出来ベク」（春秋社『和譯獨和辞典』）等々。これらの訳語を見ると、*vielleicht* に関する長年の誤解、誤訳はすでにここから始まっていたことが想像されるからである。それにしても

*Vielleicht* kommt er, *vielleicht* kommt er nicht.

彼は来るかもしれないし、来ないかもしれない

というような具体的な用法を目にしながらか、このような誤った辞書の記述が百年近くも変わらずに残っていたということは、いまから思えばむしろ不思議な話である。「たぶん彼は来るだろうし、たぶん来ないだろう」などという珍妙な言説があり得ないことぐらいは、誰にでもすぐに分かることだと思ふのだが。

それではまず、このように *vielleicht* が対比的に用いられた具体例をお目にかけてよう。すでに Grimm の *Deutsches Wörterbuch* にも、*vielleicht* のこのような使い方として、*vielleicht* kommt er, *vielleicht* auch nicht (Adelung) と so schließt sich dieses Stück, bey welchem ich meine Leser *vielleicht* zu lange aufgehalten habe, *vielleicht* auch nicht (Lessing) の二つの例が挙げられているが、それ以外の使用例である。

Peter [...] Was halten Sie davon, Präsident?

Präsident (*gravitatisch langsam*) Eure Majestät, *vielleicht* ist es so, viel-

*leicht* ist es aber auch nicht so.

Der ganze Staatsrath im Chor Ja, *vielleicht* ist es so, *vielleicht* ist es aber auch nicht so. (Georg Büchner, Leonce und Lena, 1. Act, 2. Scene)

ペーター [...] それについてどう思うかね、議長。

議長 (もったいぶってゆっくりと) 陛下、そうかもしれませぬ、しかしそうではないかもしれませぬ。

枢密院全員が口をそろえて はい、そうかもしれませぬ、しかしそうではないかもしれませぬ。

(ゲオルク・ビューヒナー、レオンツェとレーナ、第1幕、第2場)

„Du tust ihm Unrecht. Er hat ein Attachement für mich. Oder ist es meinerseits bloß Eitelkeit und Einbildung?“

„*Vielleicht. Vielleicht* auch nicht. Aber diese guten Herren..., ihr bester Freund, ihr leiblicher Bruder ist nie sicher vor ihnen. Und wenn man sich darüber erstaunt oder beklagt, so heißt es ironisch und achselzuckend: *c'est mon métier.*“ (Theodor Fontane, L'Adultera, 19. Kapitel)

「そんなことをおっしゃったら、あの方にわるいわ。あの方はわたくしに好意をもっていらっしゃるのよ。それともそれってわたくしのうぬぼれ、わたくしの思い込みにすぎないのかしら」

「そうかもね。でもそうではないかもしれないよ。しかしあの善良な連中ときたら…、彼らのいちばんの親友でさえ、彼らの肉親の兄弟でさえも、彼らに対して油断することは禁物なんだからね。そしてそのことで驚いたり嘆いたりしてみても、皮肉っぽく肩をすくめて、これが私の仕事だからね、とあの連中に言われるのがおちなさ」

(テオドール・フォンターネ、不貞の妻、第19章)

以上の例はいずれもイエスかノーかの二つの可能性を述べたものだが、*vielleicht* によってもっと多くの可能性を示した例もある。

„Ich habe ihn kurz davor erlebt. Mit ihm stimmte was nicht. Als hätte

jemand ihm einen furchtbaren Schrecken eingejagt.“

„*Vielleicht* war er krank. *Vielleicht* hatte er aus Versehen zu viele Schlaftabletten genommen. *Vielleicht* waren seine Medikamente schlecht eingestellt. *Vielleicht* hat er ein neues Beruhigungsmittel schlecht vertragen oder ein neues Blutdruckmittel. Mein Gott, Gerd, es gibt tausend Möglichkeiten, warum jemand schlecht drauf ist und einen Unfall hat.“

(Bernhard Schlink, *Selbs Mord*, 2. Teil, 11. Kapitel)

「ぼくはその直前にあいつに会っているんだ。あいつ、どこかおかしかったんだ。誰かにひどくおどかさされたみたいでね」

「もしかしたら病気だったのかもしれないさ。それとも間違っ  
て睡眠剤をのみ過ぎでしまったとか。それとも薬がおかしくなっていたとか。それとも初めて使った精神安定剤とか降圧剤とかが体質に合わなかったとか。ねえ、ゲルト、人が体調を崩したり、事故に遭ったりする理由なんて、何千もの可能性があるんだぜ」。

(ベルンハルト・シュリンク、*ゼルプの殺人*、第2部、第11章)

いずれにせよ、どの例を見ても、「たぶん」とか「おそらく」という訳語が適当でないことは、改めて論じるまでもないだろう。

さいわい現在の独和辞典からは、このようなまちがった訳語は完全に姿を消しているが、不思議なことに、現在市販されている英和辞典や仏和辞典では、これと同じ誤り（としか私には思われぬのだが）がいまだに通用しているのである。上記の「彼は来るかもしれないし、来ないかもしれない」は、英語では

*Maybe he will come, maybe he won't.*

または

*Perhaps he will come, perhaps he won't.*

ということになるだろうし、フランス語ならば

*Peut-être il viendra, peut-être pas.*

となるだろう。つまりドイツ語の *vielleicht* に相当する文副詞は、英語では *maybe* ないし *perhaps*、フランス語では *peut-être* である。これらの語に、上

にも述べたとおり、英和辞典や仏和辞典ではいまだに「たぶん」「おそらく」などの訳語が残っているのだが、これには、何か特別の理由でもあるのだろうか。

もっとも上記の用例のように *vielleicht*, *maybe*, *peut-être* 等々が対比的に二つ繰り返されるときには、誤訳の恐れはまずないだろう。問題は *vielleicht* が単独で用いられる場合である。初歩の授業の段階で *vielleicht* イコール「たぶん」というまちがった図式が頭のなかにインプットされてしまうと、のちのちとんでもない過ちを犯すことにもなりかねない。

Heute abend gehe ich in die Disko. Kommst du auch mit? — *Vielleicht*.

今晚ディスコに行くんだ。きみもいっしょに行くかい? —— どうしようかな。

ここでは *vielleicht* に「どうしようかな」という訳語を仮につけておいたが、こちらの誘いに対して相手から *vielleicht* という答えが返ってきたら、*nein* のような否定とまではいかななくても、実現の可能性はごく少ないと考えるべきであって、これを相手が「たぶんね」と答えたと思ったりしたら、それは大変な誤解である。この種の *vielleicht* の実際の使用例をなおいくつか挙げておこう。

Eitelkeit ist eine sehr verbreitete Eigenschaft, und *vielleicht* ist niemand ganz frei davon. Und in akademischen und Gelehrtenkreisen ist sie eine Art von Berufskrankheit.

(Max Weber, Politik als Beruf)

虚栄心は、きわめて広く世間に行き渡った性質であって、これから完全に自由な人間など、一人もいないのかもしれませんが。そして大学や学者の仲間うちでは、それは一種の職業病なのです。

(マックス・ウェーバー、職業としての政治)

マックス・ウェーバーはここで、虚栄心をもたぬ人間などたぶん一人もいないだろう、などと断定しているわけではない。その可能性に言及している

だけである。

Am Spätnachmittag kamen sie an; es war heiß, *vielleicht* würde es abends ein Gewitter geben, sagte der Wirt.

(Kurt Tucholsky, Rheinsberg, ein Bilderbuch für Verliebte)

午後遅く彼らは到着した。暑かった。晩には雷雨になるかもしれないね、と宿の亭主が言った。

(クルト・トゥホルスキー、恋人たちのための絵本)

ここで宿屋の亭主が言ったのは「このぶんでは晩には雷雨になるかもしれない」ということであって、「たぶん雷雨になるだろう」と言ったわけではけっしてない。

*Vielleicht* ist die Fähigkeit, ein Verbrechen verschweigen zu können, die Bedingung der menschlichen Rasse, in Gesellschaft zu leben.

(Christoph Hein, Einladung zum Lever Bourgeois)

犯罪を見て見ぬふりをすることのできる能力は、もしかすると、人類が社会の中で生きてゆくための条件なのかもしれない。

(クリストフ・ハイン、平民の起床の儀式への招待)

この場合も、犯罪を見ていながら黙っていることが、社会で生存するものの条件であるかもしれないという、単なる可能性が推測として述べられているにすぎない。

「たぶん」といえば、私自身もつい最近まで、英語の *maybe* は「たぶん」の意味に用いられるものとばかり思い込んでいた。たしかあれは私が中学生のころのことだったと思うが、ある新聞に、アメリカの巡洋艦か駆逐艦かが横浜港に入港した記事が写真入りで載ったことがある。いまでも鮮明に覚えているのだが、「艦長は在艦しているのか」という記者の質問に水兵が「メイビー」と答えたとあり、そのメイビーに御丁寧にも「たぶんね」という訳語が括弧入りでつけられていたのである。なにしろこちらは英語を習い始めたばかりの中学生、そのとき以来「メイビー＝たぶん」という

図式が脳中に刻み込まれてしまったらしい。今年になってから必要があって、vielleichtとの関係で英語の perhaps やフランス語の peut-être を調べているうちに、peut-être が「ひょっとしたら」なのに、それとまったく同じ語構成をもつ maybe がなぜ「たぶん」なのだろうかなどという、いまから思えばまったく荒唐無稽な疑問が湧いてきたのだが、結局 maybe も peut-être と同じ意味に使われることが分かったときには、文字どおり愕然としたものである。

ところで vielleicht のもつ微妙なニュアンスを伝えるものとして、短い詩を一つ御紹介しよう。悪ガキの末路を描いた漫画物語の傑作 „Max und Moritz“ の作者として有名なあの Wilhelm Busch の „Vielleicht“ と題する二節からなる詩である。

Sage nie: „Dann soll's geschehen!“  
Öffne dir ein Hinterpförtchen  
Durch „Vielleicht“, das nette Wörtchen,  
Oder sag: „Ich will mal sehen!“

Denk an des Geschickes Walten.  
Wie die Schiffer auf den Plänen  
Ihrer Fahrten stets erwähnen:  
„Wind und Wetter vorbehalten!“

第一節の第一行の Dann soll's geschehen! を日本語に訳せば、「ではそういたしましょう」ということにでもなるだろうが、そんな安請け合いはけっしてするものではない。vielleicht という素敵な言葉 (das nette Wörtchen) があるではないか、それを使って裏木戸 (ein Hinterpförtchen)、つまり逃げ道を用意しておくがいい。さもないならば「考えておきましょう」(Ich will mal sehen!) とでも言うておきなさい、というわけである。前述のごとく vielleicht は一つの可能性を示すだけであるから、これを使えば、相手に確約したことにはならない。船乗りたちの航海計画にしてもこれと同じで、予定どおりに港に着くかどうかは「風しだい、天候しだい」(Wind und

Wetter vorbehalten)というのが第二節の内容である。

ところで冒頭にも述べたように、*vielleicht*には心態詞としての用法もある。ただし*vielleicht*の場合、心態詞としての歴史はさほど古くはないように思われる。他の大部分の心態詞は、*denn*であれ*doch*であれ*ja*であれ、20世紀はもちろんのこと、19世紀、18世紀の文献にもその具体的な使用例を数多く見つけることができるが、*vielleicht*にかぎっては、私の知るかぎりでは、18世紀はもちろんのこと、19世紀ですら、心態詞としてはまだあまり用いられていなかったようである。ただしこれは、私自身がこれまでに集めた具体例からそう推測しているだけの話で、まだまだ断定するわけにはいかない。ただ私のこの考えを多少なりとも裏付けする傍証となり得るものとして、一冊本の独辞典として長い伝統をもち、かつもっとも信頼のおけるHermann PaulのDeutsches Wörterbuchの記述を挙げておこう。この辞書は1896年の初版以来、Karl Euling (1935), Alfred Schirmer (1956), Werner Betz (1966)など、何人かの学者の手によって改訂ないし増補の試みがなされてきているが、*vielleicht*に関するかぎり、その記述はまったく変わっていない。ごく短い記述なので、そのまま引用しておこう。„=mhd. *vil lîhte*. Im Mhd. hat auch bloßes *lîhte* den Sinn unseres *vielleicht*, und es ist erst allmählich Differenzierung eingetreten.“ この記述を見るかぎり、心態詞としての用法はまったく無視されているし、1966年のWerner Betzによる第5版を含めてすべての版が、この記述を一字一句違わずそのまま踏襲している。この*vielleicht*の記述に画期的な変化が見られるのが、いまから十年ほど前に刊行されたHelmut HenneとGeorg Objartelによる第9版(1992)である。画期的と言ったのは、記述の内容が一挙に十倍以上にも詳しくなり、心態詞としての用法が、プレントドルフの『若きヴェルテルの新しい悩み』からの引用例(Ich war *vielleicht* ein Idiot, Leute!)を副えて、ここで初めて指摘されているからである。念のために、この例文を、その前後の文脈をも含めて、原書からここに引用しておこう。

Ich Idiot pinnte meine gesammelten Werke an die Wand. Immerhin wußte so jeder gleich Bescheid: Hier wohnt das verkannte Genie Edger Wibeau. Ich war *vielleicht* ein Idiot, Leute! Aber ich war echt high.

ばかなぼくは、ぼくのすべての作品を壁にピンで留めたんだ。そうすりゃとにかく誰にでもすぐに分かると思ってね。ここに世間に認められない天才のエドガー・ウィボーが住んでいるんだってことがね。ぼくはなんてばかだったんだろう、ねえきみたち。でもぼくはすこぶるハイな気分だったんだ。

(ウルリヒ・プレントドルフ、若きヴェルテルの新しい悩み)

もっともこのことがただちに、vielleichtが心態詞として使われ始めたのが比較的最近のことであるということの意味しているわけではもちろんない。そもそも心態詞なるものの存在がドイツの学界で注目を浴びるようになったのが1960年代以来のことであるから、それが即座に辞書の記述に反映するはずもなく、vielleichtの心態詞としての用法が辞書に記載されたのは、私の知るかぎり、1977年に上梓された東独アカデミー版のWörterbuch der deutschen Gegenwartssprache (第6巻)が最初だったと思う。したがってPaulのDeutsches Wörterbuchの場合も、心態詞研究の成果が第9版になって初めて記述されるようになったと考えるべきかもしれない。いずれにしても、vielleichtがいつごろから心態詞として使われるようたかは私にとっても大いに興味がある問題なので、これからも引き続き調査したいと思っている。

ところで心態詞としてのvielleichtには話し手のどのような気持が籠もっているのだろうか。上に掲げたプレントドルフの用例について検討してみよう。ついでに言えば、vielleichtに心態詞としての機能があることを知らなければ、このvielleichtを文副詞であると思い込んで、「もしかするとぼくはばかだったのかもしれない」と誤訳してしまうことも大いにあり得ることである。しかしこの発話は、文の末尾に感嘆符がついていることから察せられるように、明らかに感嘆文であって、「考えてみればぼくもずいぶんばかなことをしたものだ」という主人公Edger Wibeauの慨嘆の気持が、心態詞vielleichtに籠められているのである。

ついでに言えば、このような場合によく用いられ心態詞としては、

*vielleicht* と並んで *aber* がある。したがってこの場合の Edger Wibeau の発話としては、Ich war *aber* ein Idiot, Leute! という言い方もあり得るわけである。もともとドイツ語を母語としないわれわれ外国人にとっては、子供のときから長年ドイツで生活でもしていないかぎり、語感として Ich war *aber* ein Idiot! と Ich war *vielleicht* ein Idiot! のニュアンスの違いを区別することは不可能に近い。しかしドイツ語を母語とする人たちにとっても、両者の違いを語感として区別することはできても、その違いをきちんと説明することは、かならずしも容易ではないと思われる。日本語を母語とする私たちにとって、「きみってばかなやつだなあ」と「きみもばかなやつだなあ」のニュアンスの違いを説明しろと言われたら答えに窮するのと同じことであろう。ドイツでの心態詞研究の草分けの一人である Harald Weydt は、外国人のドイツ語学習者のために編纂した心態詞入門書<sup>2)</sup>のなかで、話者の驚きの気持を表す心態詞 *aber* と *vielleicht* の違いについて、両者は基本的に交換可能であるとしたうえで（たとえばコーヒーに口をつけた途端、それがおそろしく熱かった場合の Aua, der Kaffee ist *aber* heiß! と Aua, der Kaffee ist *vielleicht* heiß! や、ものすごく高い塔を目にして驚いたときに発する嘆声 Sieh mal, der Turm ist *aber* hoch! と Sieh mal, der Turm ist *vielleicht* hoch! など）、両者にはしかし微妙な違いがあるとして、次の二点を挙げている。第一に、数量的な異常さへの驚きの場合にはどちらかと言えば *aber* が、質的な異常さへの驚きには *vielleicht* が使われる傾向があるとの指摘である。その一例として、顔じゅうひげだらけの男に対しては Der hat *aber* einen Bart!、珍妙なひげを生やした男に対しては Der hat *vielleicht* einen Bart! という驚きの言葉を発するのが自然であると述べている。第二には、自分が驚くべき経験をしたその事実を、あとになってその場に居合わせなかった他人に報告する場合にかぎっては、つまりすでに過ぎ去った事柄を人に伝えるようなときにかぎっては、ほとんどもっぱら *vielleicht* が用いられるとの指摘である。そしてその具体例として、Der Kellner war *vielleicht* unhöflich. (あのときのボーイの態度は実に無礼だったよ) が掲げられているが、そう言われてみれば、上に挙げた Edger Wibeau の Ich war *vielleicht* ein Idiot, Leute! なども、その典型的な例の一つと考えることができるかもしれない。

同じような状況で用いられる心態詞 *vielleicht* と *aber* の微妙なニュアンス

の違いについては、Harald Weinrichの『ドイツ語テキスト文法』にも興味深い記述が見られる<sup>3)</sup>。すなわち *neutral* ないし *positiv* な驚きの場合には *aber* が、*negativ* な驚きの場合にはどちらかといえば *vielleicht* のほうが多く用いられる傾向があるとの記述である。そしてその具体例として *Diesmal sind die Klassenarbeiten aber wirklich gut ausgefallen!* と *Diesmal sind die Klassenarbeiten vielleicht schlecht ausgefallen!* の二つを対比させている。これは生徒たちの宿題の出来具合についての教師の論評であろうが、「今回の宿題の出来は実にすばらしかったよ」の場合には *aber* が、「今回の宿題の出来はまったくひどいものだったよ」の場合には *vielleicht* が使われるというわけである。そして後者の場合に *aber* を使うことはあり得るが、前者、すなわち *positiv* な驚きの場合に心態詞として *vielleicht* を用いることはないと言っている。そう言われると、前掲の Edger Wibeau の *Ich war vielleicht ein Idiot!* もごく自然な表現のように思えてくるのである。

それでは最後に心態詞 *vielleicht* の具体例をいくつか御紹介して本稿を閉じることにしたい。これらの用例のなかには、上述の Weydt や Weinrich の説明をなるほどと思わせるものもあれば、それとまったく矛盾すると思われるものもあることに気づかれることであろう。ドイツ語であれ、日本語であれ、心態詞的なものを論理的に言葉で説明することのむずかしさを、あらためて思い知らされるのである。

„Haben Sie viel Phantasie?“ fragte er. „Dann stellen Sie sich vor, ich bringe Ihnen jetzt einen Blumenstrauß“.

„Meine Lieblingsblumen sind Nelken“, sagte Charlotte und musterte ihn kühl.

„Erraten!“ sagte Kowalski und streckte seine leere Hand aus. „Drei Dutzend!“

„Sie sind *vielleicht* großzügig“, sagte Charlotte. „Der geborene Kavalier.“

(Hans Helmut Kirst, 08/15 im Krieg)

「あなた、想像力は豊富ですか」と彼は尋ねた。「だったら一つ想像してみてください、ぼくがいまあなたに花束をもってきたと」

「わたしの好きな花はカーネーションよ」とシャルロツテは言って、

冷ややかに彼を見た。

「ずばりそのとおり」とコヴァルスキーは言い、からの手を彼女に差し出した。「36本もありますよ」

「ずいぶん気前がいいのね」とシャルロッテは言った。「生まれながらの紳士だわ」（ハンス・ヘルムート・キルスト、戦時中の08/15）

„Das war *vielleicht* ein Kerl, Herr Canaris! Wie der vor mir als amerikanischer Diplomat auftrat. Die Sicherheit! Die Ruhe, nachdem ihn einer meiner Leute verhaftet hatte!“ Von Felseneck lachte herzlich.

(Johannes Mario Simmel, Es muß nicht immer Kaviar sein, 1. Buch, 2. Kapitel, 6)

「あれはまったく大したやつでしたよ、カナーリスさん。アメリカの外交官のふりをしてわたしの前に現れたときのあの姿ときたら。あの自信たっぷりの様子ときたら。わたしの部下の一人がやつを逮捕したあとの、やつのあの落ち着き払った態度ときたら」フォン・フェルゼンエックは心から笑った。

(ヨハンネス・マリオ・ズインメル、いつもキャビアでなくても、第1巻、第2章、6)

Momo beschloß, auf ihn zu warten. Sie setzte sich vor seine Zimmertür auf die Treppe. Es wurde langsam dunkel, und sie schlief ein.

Es mußte schon spät in der Nacht sein, als sie durch polternde Schritte und rauhen Gesang geweckt wurde. Es war Nicola, der die Treppe heraufschwankte. als er das Kind sah, blieb er verdutzt stehen.

„He, Momo!“ brummte er, und es bereitete ihm sichtlich Verlegenheit, daß sie ihn so sah, „gibt’s dich auch noch! Was suchst du denn hier?“

„Dich“, antwortete Momo schüchtern.

„Na, du bist mir *vielleicht* eine!“ sagte Nicola und schüttelte lächelnd den Kopf. „Kommt hier mitten in der Nacht her, um nach ihrem alten Freund Nicola zu sehen. Ja, ich hätte dich ja auch schon längst mal wieder besucht,

aber ich hab' einfach keine Zeit mehr für solche... Privatsachen.“

(Michael Ende, Momo, 7.Kapitel)

モーモは彼（ニコーラ）の帰りを待つことに決めた。彼の部屋のドアのまえの階段に腰を下ろした。あたりは次第に暗くなり、いつのまにか眠り込んでしまった。

夜もだいたい更けていたにちがいないが、彼女はドタンバタンという足音と粗野な歌声に目を覚ました。ふらつきながら階段を上がってきたのはニコーラだった。彼はその子（モーモ）に気づくと、びっくりして立ち止まった。

「おい、モーモ」と彼はうなった。こんな姿を彼女に見られて、彼は明らかに狼狽していた。

「おまえ、まだ生きていたのか。こんなところで何を探しているんだね」

「あなたをだわ」とモーモはおずおずと答えた。

「まったく、おまえってやつは」とニコーラは言い、ほほえみながら首を何度も左右にふった。「こんな真夜中に旧友のニコーラの様子を見に来るなんて。そうさ、おれだってね、前々から一度おまえを訪ねたかったんだよ。でもねえ、もうおれには時間がなくてね、そうだった……プライベートなことにはね」

(ミヒャエル・エンデ、モーモ、第7章)

Patsy erschien in der Badezimmertür, mit einem Turban um den Kopf und einem Badetuch um die restliche Figur. Sie grient auf eine außerordentlich zufriedene, ungemein satte Art.

„Mann, hab ich *vielleicht* einen Hunger“, sagte sie und „Hallo, Kristof“, mit einem netten Lächeln. „Geile Hose.“ Damit verschwand sie in der Küche, unsere gedankenschweren Mienen einfach übersehend.

(Jörg Juretzka, Prickel)

パツィーが浴室のドアから姿を現した。頭にはターバンを巻き、ほかの部分はバスタオルに包んで。彼女は、きわめて満ち足りた、満足

しきった様子でにやりと笑った。

「ねえ、もう腹ぺこななのよ」と言い、「こんちわ、クリストフ」と感じのいい笑みを浮かべた。「すてきなズボンはいてるじゃない」そう言うと彼女は、ほくたちの深刻な顔つきなどあっさり無視して、台所に姿を消した。  
(イエルク・ユレッカ、プリッケル)

#### 出典著者一覧表

Büchner, Georg (1813 – 37)	Busch, Wilhelm (1832 – 1908)
Ende, Michael (1929 – 95)	Fontane, Theodor (1819 – 98)
Hein, Christoph (1944 –)	Juretzka, Jörg (1955 –)
Kirst, Hans Helmut (1914 –)	Plenzdorf, Ulrich (1934 –)
Schlink, Bernhard (1944 –)	Simmel, Johannes Mario (1924 –)
Tucholsky, Kurt (1890 – 1935)	Weber, Max (1864 – 1920)

#### 注

- 1) 一つだけ例を挙げると、三省堂の『新コンサイス英和辞典』の maybe の訳語は「たぶん、ことによると」であり、小学館の『ロベール仏和大辞典』の peut-être の訳語は「たぶん、おそらく」である。ただし仏和辞典では、1993年に白水社から Le Dico という書名で刊行された『現代フランス語辞典』だけはよき例外で、peut-être に「…かもしれない」という正しい訳語をつけ、さらに「たぶん」との違いなどをはっきり指摘している。
- 2) Weydt, Harald/ Harden, Theo/ Hentschel, Elke/ Rösler, Dietmar : Kleine deutsche Partikellehre, Stuttgart, 1983
- 3) Weinrich, Harald: Textgrammatik der deutschen Sprache, Mannheim; Leipzig; Wien; Zürich, 1993; S.854

(慶應義塾大学名誉教授)